

令和3年度
横浜市立高等学校及び併設型中学校

第三者評価結果

横浜市教育委員会

< 目 次 >

I 「横浜市立高等学校及び併設型中学校」の学校評価	1
II 令和3年度第三者評価について	2
1 実施概要	
2 評価者及び訪問調査校	
III 訪問調査校の評価	3
1 みなと総合高等学校	4
2 横浜サイエンスフロンティア高等学校・附属中学校	9

I 「横浜市立高等学校及び併設型中学校」の学校評価

市立高校及び併設型中学校は、学校評価の基本である全教職員による自己評価と保護者や地域、その他学校関係者等による学校関係者評価を行うとともに、年間2～4校に対し教育活動その他の学校運営について外部の専門家等による第三者評価を行います。

市立高校及び併設型中学校の学校評価は、次の手順で実施します。

1 自己評価

各学校は、校内評価委員会を組織します。校内評価委員会は、教職員による学校評価、生徒による学校評価、授業評価、保護者及び地域による学校評価を組織的に行い、評価結果の分析により課題を明らかにするとともに、学校関係者評価の結果を踏まえ、重点課題の改善策を中心に「自己評価書」を作成します。

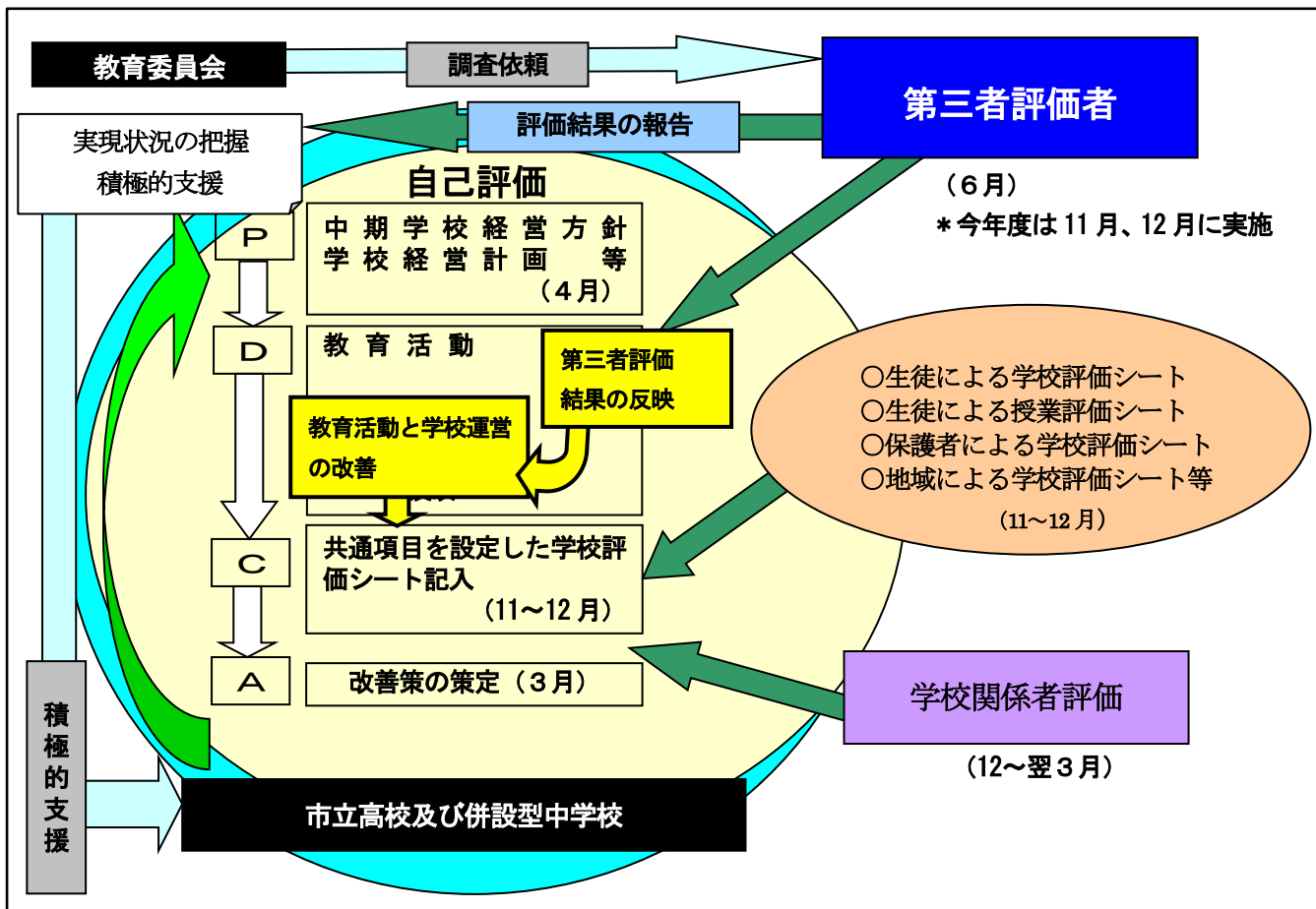
2 学校関係者評価

各学校は、学校関係者評価を実施するため、生徒の保護者や地域、その他学校関係者等によって構成される学校関係者評価委員会を組織します。学校関係者評価委員会は、各学校でまとめた評価の結果等を活用するとともに、授業や学校行事等の教育活動を観察し、「学校関係者評価書」を作成します。

3 第三者評価

教育委員会は、第三者評価を実施するため、学校運営に関する外部の専門家等による評価者（以下「第三者評価者」という。）に調査を依頼します。第三者評価者は、教育活動その他の学校運営について、年間2～4校の訪問調査を行います。調査結果は教育委員会が取りまとめます。

＜市立高校及び併設型中学校 学校評価の体系図＞



Ⅱ 令和3年度第三者評価について

1 実施概要

(1) 実施方法

- ① 1校につき3名の評価者が訪問します。
- ② 評価者は、令和2年度の「自己評価書」「学校関係者評価書」及び令和3年度「学校経営計画」について主に重点取組項目を中心に校長から説明を受けた後、授業参観、施設・設備の観察、教職員（校長・副校長・教務主任等）及び在校生からのヒアリング等を通して評価します。
- ③ 教育委員会は、評価者からの評価と講評をとりまとめ、第三者評価結果を作成し、公表します。

(2) 訪問調査校及び日程

ア 訪問調査校

みなと総合高等学校、横浜サイエンスフロンティア高等学校・附属中学校

イ 実施日程

11月22日：みなと総合高等学校

12月2日：横浜サイエンスフロンティア高等学校・附属中学校

(3) 活用

ア 学校は、評価結果を教育活動及び学校運営の改善に反映させます。

イ 教育委員会は、各学校の教育環境の改善に向けた必要な措置などの施策に生かします。

2 評価者及び訪問調査校（五十音順）

評価者氏名	所属等	訪問調査校
青柳 寛子	横浜市PTA連絡協議会 副会長	横浜サイエンスフロンティア 高等学校・附属中学校
岩谷 伸一	横浜商工会議所 推薦 学校法人 岩谷学園学園長	みなと総合高等学校
植田 みどり	国立教育政策研究所 総括研究官	横浜サイエンスフロンティア 高等学校・附属中学校
野中 慎一郎	横浜市PTA連絡協議会 会計	みなと総合高等学校
浜田 博文	国立大学法人筑波大学 人間系（教育学域） 教授	みなと総合高等学校
森 博昭	横浜市立すすき野中学校 校長	横浜サイエンスフロンティア 高等学校・附属中学校

※所属等は調査時のものです。

Ⅲ 訪問調査校の評価



みなと総合高等学校の概要

創 立：平成 13 年
住 所：横浜市中区山下町 231
課 程 等：単位制による全日制の課程
 総合学科
クラス数：18 クラス
生徒数：693 名（令和 3 年 4 月 1 日現在）
学 校 長：宮村 浩文

横浜サイエンスフロンティア 高等学校・附属中学校の概要

創 立：高等学校 平成 21 年
 附属中学校 平成 29 年
住 所：横浜市鶴見区小野町 6
課 程 等：高等学校
 単位制による全日制の課程 理数科
クラス数：24 クラス
 高等学校 18 クラス
 附属中学校 6 クラス
生徒数：933 名（令和 3 年 4 月 1 日現在）
 高等学校 693 名
 附属中学校 240 名
学 校 長：永瀬 哲



横浜市立 みなと総合 高等学校

(1) 魅力ある学校づくりの推進状況

観点	評価者 1	評価者 2	評価者 3	評価規準
市立高校の魅力づくり	(A)	(A)	A	取組が各校の目標以上に進んでいる
	B	B	(B)	取組が各校の目標をほぼ達成している
	C	C	C	取組があまり行われていない
進路希望実現への支援	(A)	A	(A)	取組が各校の目標以上に進んでいる
	B	(B)	B	取組が各校の目標をほぼ達成している
	C	C	C	取組があまり行われていない
市立高校における グローバル人材の育成	A	(A)	A	取組が各校の目標以上に進んでいる
	(B)	B	(B)	取組が各校の目標をほぼ達成している
	C	C	C	取組があまり行われていない

*評価者1は書面評価

【市立高校の魅力づくり】

- ・総合学科の特徴を踏まえて幅広い選択科目を設定し、生徒の多様なニーズに対応する取組が展開されており、そのための履修指導とキャリア教育についても、生徒による評価の結果をみるかぎり、プラスの方向に向かっていると思われる。
- ・「総合的な探究の時間」の活動を通して、生徒がフェアトレードについての気づきを得たり、大豆ミートを介して食糧問題を考えたり、身近のデリバリー型給食の改善を提言するなど、教育の成果を示しはじめている。
- ・学校ランドデザインは「人間力向上」や「主体的な学び」についての考えがよく分かり、それを支援する学校の取組も明確に見える。教育目標、教育方針にしっかりとした繋がりが見えて誰もが理解しやすい。今後への期待として、SDGs との連携をより強化することで総合学科としての“強みの幅”をさらに広げることができるのではないかと感じた。

【進路希望実現への支援】

- ・生徒の進路のほとんどが進学であるがその進路先は多種多様であり、生徒のニーズに基づく指導が行われていると見受けられる。
- ・進路希望のより充実した実現に向けて「企業や大学との連携」の推進を期待する。

【市立高校におけるグローバル人材の育成】

- ・キャリア教育と併せてのグローバル人材の育成の考えはとても期待が持てる。コロナ禍の状況では非常に身動きがとりづらい現状であるが、情勢が落ち着いたら積極的な展開を希望する。また、海外研修だけでなく、国内の英語に明るい企業や外資系企業等と連携することで、グローバル人材育成の対象生徒が増えることも期待したい。
- ・訪問留学生へのバディ活動、他校留学生や海外高校生徒との交流、ATOPを活用した市立高校生への海外留学の推進、現在はコロナで休止しているがバンクーバー市や上海市との国際交流など、学校として多彩な事業を展開し、生徒が多様性を身につける様々な機会を提供している。今後も、生徒たちが多様な人や世界に出会い、それらの人たちと共生し、異集団で活動することで生まれるダイナミズムを体得できるように、継続して様々な事業を展開してほしい。これらの体験が生徒たちに自分の生きる世界や進路を広げ、社会に自由に羽ばたき、豊かで円滑な社会生活を送れるように期待している。

(2) 教育活動の状況

観点	評価者 1	評価者 2	評価者 3	評価規準
《教育課程》 学校の実態、課程や学科の特色を十分考慮した教育課程の編成がなされているか	Ⓐ	A	A	中期学校経営方針に示された取組が計画を大幅に上回って進んでいる
	B	Ⓑ	Ⓑ	中期学校経営方針に示された取組が概ね進捗している
	C	C	C	中期学校経営方針に示された取組があまり行われていない
《進路指導》 進路指導が綿密に計画され、生徒の希望進路を叶える取組が行われているか	Ⓐ	A	A	どの生徒も進路の高い目標を設定し、自ら目標達成に向けた進路計画の立案や実践を行っている
	B	Ⓑ	Ⓑ	生徒は学校からの進路情報を十分に理解し、進路実現に向けて前向きに取り組んでいる
	C	C	C	進路指導に対して不安を訴える生徒が大勢いるにもかかわらず、進路指導の改善があまり行われていない

*評価者1は書面評価

【教育課程】

- 総合学科の学校として、選択科目を幅広く設定し、生徒一人ひとりの興味・関心に対応しようとする取り組みが行われている。生徒による評価（全年次）の1の項目「希望する進路のために必要な科目や、興味・関心を満たす科目が設定されている。」で94.1%の肯定的評価を得ていることはその成果と受けとめられる。また保護者による評価の2「本校のカリキュラムは生徒の進路実現に適しているか」の項目で全年次で80.8%の肯定的評価を得ていることも、プラスに受けとめてよい。ただし、3年次の保護者の評価が2年次までと比べて低くなる傾向には引き続き留意が必要である。
- 「自分探し」ができた生徒には様々な選択科目があることで、自らの目標が明確となるが、なかなか未来が描けない生徒もいるであろう。そのような生徒や家族での相談・悩みにはできるだけ耳を傾けていただきたい。企業や大学との連携を推進していくことで、さまざまな世界からの刺激を与えることができ、未来を描けない生徒への背中の一押しができるものと考えよう。
- 授業見学は「物理基礎、日本史B、数学Ⅱ、英語表現Ⅱ」の4科目について行ったが、どのクラスも少人数（6～16人）クラスで、生徒たちが真剣に授業に取り組んでいた。英語表現Ⅱでは、新しい教育方法で生徒たちが楽しそうに生き生きと英会話を楽しんでいる様子が見られた。校長説明によると「生徒のプレゼン能力は高い」とのことであり、発表会に合わせて研鑽を積み、能力アップに努めているとのことである。生徒が自立して目的をもち、自己鍛錬ができれば、大きな能力向上に繋がるであろう。



総合的な探究の時間：コラボレーション商品

【進路指導】

- ・訪問調査資料によると生徒の進路は進学が大勢を占めているが、進路先は多種多様であり、個々の生徒の適性に合った指導助言には相当の計画性と労力を要していると推察できる。「進路説明会等で進路に関する情報を十分に理解しているか。」という項目について生徒の肯定的評価が全年次で 78.4%あるということはプラスの受けとめ方をしてよいが、キャリアガイダンスについては引き続き、一人ひとりの生徒と保護者の実態や要望を汲み取りながら取り組んでいく必要がある。
- ・キャリア教育は総合高校の背骨であるが、「産業社会と人間」などそれに関わる教科の時間数は少ない。他のすべての科目でキャリア教育の内容項目をある程度分担して担わせることができれば、キャリア教育に多くの時間を使えることになる。また、教科・科目だけでなく行事も使える。これらの全てを有機的に連結し、それらを活用していくことが総合高校の目的を達成していくことにつながる。そのためにもすべての教科・科目行事等の内容を俯瞰できる一覧表のようなものを作り、みんなが理解できるようにすると良い。それを基に教職員、生徒、保護者が理解を深め、同じ目的と意思をもって教育に参加できたら素晴らしいと思う。
- ・アンケート結果による改善策として、「年次ごとの保護者会の開催」とあるが、2年次の保護者に限り、1回/年ではなく2回/年が望ましいと感じた。

(3) 学校経営の状況

観点	評価者 1	評価者 2	評価者 3	評価規準
《組織運営及び教職員研修》 教職員が意欲的に業務に取り組める組織であるか。また、課題解決のための教職員研修が行われているか	A	A	A	情報共有が徹底され、様々な問題に対して迅速に対処している協力関係がある。また、学校は常に教職員の研鑽に努めている
	ⓑ	ⓑ	ⓑ	一人ひとりの教職員は意欲的に業務に取り組んでいる。また、様々な研修によって教職員の力量が向上している
	C	C	C	教職員組織の見直しが滞っている。また、教職員の力量向上のための研修があまり行われていない
《危機管理》 防災計画・防犯計画は学校の実態を踏まえた計画であり、訓練が適切に行われているか	A	A	A	生徒は防災及び防犯に対する意識が高い。また、地理条件に合った訓練を行い、非常時には適切な行動が取れる
	ⓑ	B	ⓑ	生徒に避難経路を周知し、十分な訓練を行っている。また、防犯についても適切な訓練等の指導を行っている
	C	ⓒ	C	生徒に避難経路が周知されていない。また、防犯訓練等の指導があまり実施されていない

* 評価者 1 は書面評価

【組織運営】

- ・学校評価シートによると組織運営に関わる教職員の認識について「研究・研修」に関して、肯定的な評価は 59.6%にとどまっており、27.7%は「あまり実現できていない」と答えているという点は気がかりである。教員の意識の中に、「研究・研修」への前向きな姿勢が増えていくことを期待したい。
- ・キャリアガイダンス部の調査書発行業務について、キャリアガイダンス部のシステムと校内の成績処理システムの連携に不具合が見られるとのことである。システム毎にデータを入れているとそのようなことが発生するので、データベースソフト等を使ってデータの一元化をする必要がある。また「現在のみなど総合高校は、人に仕事がついている状況で、これを組織的な取り組みに変えていきたい。しかし、横浜市立の総合高校は2校しかないので、育成が難しい」と校長から説明があった。これも市教委とともに横浜市立高校全体で取り組み解決してほしい。

- ・「進路の手引き R3年度 キャリアガイダンス部発行」が素晴らしい。できるだけ早い時期に生徒に渡して、生徒の「虎の巻」となることを期待する。また一方で“総合学科での幅広い教育の実現”で気になることは教職員の負担である。教職員研修と併せて教職員の心身のケアも期待する。
- ・校務成績システム連携での不具合の件、別の学校でも同様な話を耳にするが、有識者や教職員による簡易システムの構築は安全性や信ぴょう性の保障がとれない。外注によるシステム構築が急務である。

【危機管理】

- ・危機管理については、教職員の評価はかなり肯定的になっており、日常的な構えはされているようだが、生徒による評価の12の項目「災害時の校内の避難経路を把握している。」について、全年次の肯定的評価は54.0%にとどまっており、留意すべき点と考える。
- ・アンケート調査では、多くの項目について改善がなされていることが分かる。しかし、生徒アンケートの中で令和元年から毎年のように災害時の避難経路の把握ができていない状況が続いている。このことで、危機管理についてC評価とした。いつ起こってもおかしくないと言われている大地震等への備えは人命尊重の観点から急を要する事項である。生徒は選択授業で移動が多く避難経路の把握が難しいという実情があるようだが、至急対応をとる必要がある。当事者意識を生徒に持たせる工夫として、避難計画の検討や訓練の計画を生徒主体で検討したり実施したりしてみたらいかか。
- ・避難経路についての課題がアンケートで目立っているが、密を避けるために避難訓練ができていないとのこと。この課題は避難訓練で改善は見込めると考える。一般教室、共用廊下の整理整頓や、8階建て校舎に必要と思われる転落防止等の安全設備も問題ない。

（４）いじめに関する項目（いじめへの対応）

- ・生徒情報交換会で機動的に教職員間の情報交換を図って生徒の問題行動等の迅速な解決をしているとのことである。また、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーとの連携も見られる。教員研修に面談研修を入れ、各教員の指導能力向上も図っている。しかし、いじめはいつでも起きてもおかしくないといわれている。是非、組織の一層の体制充実を図りいじめのない学校であってほしい。
- ・生徒や学校の様子では特に気になる点はないが、アンケート結果では安心とは言えない結果となっている。学校の取組として「ケース会議を積極的に実施する」とあるので改善に期待したい。

(5) 総合所見

- ・総合的にみて、標準以上の水準にあると拝察する。総合学科としての特長である生徒の多種多様なニーズに対応しながら継続して学校の特色を明確に打ち出すためには、教職員の業務量が膨らむことになると思われる。そこで十分な人員配置とともに、教職員、保護者、生徒の間の適切なコミュニケーション回路の維持が不可欠だろうと思う。引き続き、着実に前進していくことを願っている。
- ・「アンケートで肯定的な評価 70%を良しとするのか」という校長の問いかけ、教員の授業力や生徒指導力のさらなる向上を、との思いの表明で、この学校が校長のリーダーシップのもとより高い理想をもって改善活動をしようとしていることが分かった。この考え方、取組を続けて学校の改善を進めてほしい。
- ・教員は様々な仕事が増え多忙を極めており、労働環境の悪化を招いているといわれている。この労働環境の悪化は教員希望者の減少を招き、教育の質の劣化を招きかねない。それを改善していくためには、教員が一番重要な生徒指導、授業等に時間をさき、それに集中する環境を作ることが大切である。教員でなくてもできる仕事は教員以外のスタッフを充実させ、機械や ICT により行うようにすることで問題を解決していく必要がある。この学校でも様々な取り組みがなされているが、市教委とともにもっとこれを進めていく必要がある。
- ・時代とともに知識や技能は進歩していき、将来にわたって社会でのその重みが変わっていく。専門科目の内容もそれを考慮して変えていかないと生徒たちが学ぶものが陳腐化してしまう。生徒たちが将来に有用な知識・技能を習得し、それを活用して社会で活躍できるように考えていく必要がある。
- ・総合学科高校では、入学前からの心持ちがとても重要であると感じた。義務教育の延長の気持ちで入学すると自分探しに時間がかかり時間的損失を伴う。入学前の生徒と保護者へ「総合学科」を十分に理解して入学される必要があることを強く感じた。授業の様子は生徒が授業に向かう姿勢が良好であった。服装や髪型など自身の表現方法はさまざまであるが、生徒の気持ちが前を向いていることを感じた。
- ・英語表現Ⅱの授業は GIGA スクール構想の『活用』と言える授業であり、生徒の端末利用、校内ネットワークを利用した通信、教員側のマネージャー端末での集計といったシステム化が実現され運用されており興味深い授業だった。一方、GIGA スクール構想の実現により教職員へ求められるスキルの範囲が、みなと総合高校に限らず、教職員の許容を超えているのではないかと感じた。
- ・学校評価において、正確な現状分析と目的に沿った課題設定や取組が明確にされており、これからの変化に大きな期待を寄せるところ。アンケート結果も令和元年度より 2 年度は好転している項目も多く、今後に期待する。



上海姉妹校オンライン交流

(1) 魅力ある学校づくりの推進状況

観点	評価者 1	評価者 2	評価者 3	評価規準
市立高校の魅力づくり	A	Ⓐ	A	取組が各校の目標以上に進んでいる
	Ⓑ	B	Ⓑ	取組が各校の目標をほぼ達成している
	C	C	C	取組があまり行われていない
進路希望実現への支援	Ⓐ	Ⓐ	A	取組が各校の目標以上に進んでいる
	B	B	Ⓑ	取組が各校の目標をほぼ達成している
	C	C	C	取組があまり行われていない
市立高校における グローバル人材の育成	A	A	Ⓐ	取組が各校の目標以上に進んでいる
	Ⓑ	Ⓑ	B	取組が各校の目標をほぼ達成している
	C	C	C	取組があまり行われていない
中高一貫教育の推進	A	A	A	取組が各校の目標以上に進んでいる
	Ⓑ	Ⓑ	Ⓑ	取組が各校の目標をほぼ達成している
	C	C	C	取組があまり行われていない

【市立高校の魅力づくり】

- これまでのスーパーグローバルハイスクール（SGH）としての実績を生かしながら、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）としての取組を着実に実行し、魅力ある高校教育の充実を図っている点は評価できる。またサイエンス教育の拠点校としての活動も予定されており、SSHの活動成果を市内の高校に普及する役割を担うなど、新たな役割にも期待したい。
- SSHの取組を通して育成する4つの資質能力それぞれを向上させるための具体的な取組が、コロナ禍においても、ICT機器を活用してオンラインで海外の提携校や研究者との交流を図るなどの工夫をしながら着実に進められている点も評価できる。
- 独自プログラムであるサイエンスリテラシー（課題研究）は、1年、2年と学年進行に合わせて、基礎から具体的な活動に発展するように設計され、SDGsに関する課題に取り組み、世界的視野に立った問題解決能力の育成が図られるような活動が着実に行われている点も評価できる。

【進路希望実現への支援】

- 進路希望実現については、3年間を見通した進路計画の作成や、生徒一人ひとりの思いを把握するための面談機会の確保、保護者への情報提供の充実、卒業生を活用した進路フォーラムや大学ツアーの実施など、多様な形で進学指導重点校としての活動を具体的にかつ着実に実施している点は評価できる。また進路実績と関しても国公立大学現役合格者が開校時の目標値であった30%からここ数年間で40%前後まで上昇するなど成果が現れている点も評価できる。
- 進学指導重点校として、「Ai GROW*」を取り入れるなど、学力のみではなく、自ら将来を切り開く力の育成にも丁寧に実施されていることは今後もぜひ続けていただきたい。
- 大学名のみにとらわれず、将来の夢の実現に向けての進路指導が今後も継続されることに期待する。

* Ai GROW（アイ グロー）…民間業者が開発した生徒の資質・能力を可視化するアセスメントツールのこと。

【市立高校におけるグローバル人材の育成】

- ・SSH指定、SGHネットワーク参加校の認定などを背景に、科学技術関係人材、グローバル人材の育成に継続的、発展的に取り組んでいる教育活動が、魅力ある市立高校としてのアピールにつながっている。また、日々の教育活動が、結果として進路希望の実現に現れていることも大いに評価できる。
- ・新型コロナウイルス感染症の影響で、海外研修が2年間中止となっている中でも、多様な文化・価値観への理解、世界的視野に立った問題解決能力、異文化コミュニケーション能力等の育成のための手立てを様々に工夫している。特に、学校として結果よりもチャレンジする意欲を大事にする姿勢が、生徒一人ひとりに浸透しているのを感じる。一日も早く現在の状況が改善し、海外での研修など、生徒が世界を肌で感じられる機会を与えられるようになることを願っている。
- ・過去5年間のSGHの活動を踏まえ、その取組が「横浜版SGH」として継続されていて、文部科学省から「SGHネットワーク参加校」の認定を受けた点を見ても、グローバル人材の育成に対する姿勢は十分に評価できる。

【中高一貫教育の推進】

- ・附属中学校ではグローバルエリートたるサイエンスエリートを育成するためのサイエンススタディーズ、DEEP 学習、フロンティアタイムなど特色ある教育活動を、コロナ禍においても、ICT 機器を活用したり、実施可能な活動に転換したりするなどの様々な工夫をすることで、着実に実施している点は評価できる。また中高一貫教育校における中学校として、高等学校でのサイエンスリテラシーの土台となる学習として位置付け、高等学校との連続性、接続性を意識した教育活動が展開されている点も評価できる。
- ・「サイエンスエリート」の育成を掲げ、6年間の教育課程を編成・実施する中で、1年生段階でも課題研究をスタートするなど、工夫・改善を続けている。中学校の教員と高校の教員が連携して指導を行ったり、高校と同様に外部機関と連携しての教育活動やICT機器の活用を積極的に行ったりするなど、中高一貫教育の取組が充実していると感じた。
- ・附属中学校では、高校の「サイエンスリテラシー」につながる「サイエンススタディーズ」を実施しており、進級をするごとに段階をふんで目標を設定するなど、高等学校へ進級してもスムーズにいくよう努力している様子が見える。基盤形成期に生徒が自身を探究する時間として実施している「フロンティアタイム」は今後もぜひ続けていただきたい。



附属中学校：フィールドワーク

(2) 教育活動の状況

観点	評価者 1	評価者 2	評価者 3	評価規準
《教育課程》（高等学校） 学校の実態、課程や学科の特色を十分考慮した教育課程の編成がなされているか	A	A	Ⓐ	中期学校経営方針に示された取組が計画を大幅に上回って進んでいる
	Ⓑ	Ⓑ	B	中期学校経営方針に示された取組が概ね進捗している
	C	C	C	中期学校経営方針に示された取組があまり行われていない
《進路指導》（高等学校） 進路指導が綿密に計画され、生徒の希望進路を叶える取組が行われているか	A	A	A	どの生徒も進路の高い目標を設定し、自ら目標達成に向けた進路計画の立案や実践を行っている
	Ⓑ	Ⓑ	Ⓑ	生徒は学校からの進路情報を十分に理解し、進路実現に向けて前向きに取り組んでいる
	C	C	C	進路指導に対して不安を訴える生徒が大勢いるにもかかわらず、進路指導の改善があまり行われていない
《教育課程》（附属中学校） 学校の実態、課程や学科の特色を十分考慮した教育課程の編成がなされているか	A	A	Ⓐ	中期学校経営方針に示された取組が計画を大幅に上回って進んでいる
	Ⓑ	Ⓑ	B	中期学校経営方針に示された取組が概ね進捗している
	C	C	C	中期学校経営方針に示された取組があまり行われていない
《生徒指導・教育相談》 （附属中学校） 生徒の生活習慣の確立及び規範意識の形成に向けて教職員一丸となって取り組んでいるか	A	A	A	すべての教育活動を通じた豊かな人間関係づくりや関係機関との連携及び問題行動の未然防止や規範意識を醸成する取組が充実している
	Ⓑ	Ⓑ	Ⓑ	生活習慣・規範意識等の改善に向けた取組の効果が表れている
	C	C	C	生活習慣・規範意識等の改善に向けた取組があまり行われていない

【教育課程】

- ・観点別評価と評定の在り方について課題と捉えており、その点について中高一貫教育校としての利点を生かして、中学校での取組を参考にしたり、中学校の教員との合同研修を行ったりするなど多様な研修機会を設定して、高等学校の教員の理解の促進と、評価の改善を目指している点は評価できる。
- ・教育理念や教育課題への理解、学校の理念の共有が教員間で十分にできていないという課題については、創設当時から学校に関わっておられる特別科学技術顧問や常任スーパーアドバイザーなどから直接話を聞くなどの研修機会を設けて、理解の促進を図っている。またサイエンスグローバル事務局が教員に対して講義を行うなど、同事務局が中心となった活動を展開しており、今後の改善に期待したい。
- ・中高一貫教育校として6年間の一貫した教育課程の在り方について、中学校とも連携しながら検討し、高等学校のサイエンスリテラシーと中学校のサイエンススタディーズのように具体的に取り組み始めているものもある点は評価できる。今後は取組の成果と課題を検証しながら、同校の特色ある教育活動を充実させるための6年間の一貫した教育課程の在り方を模索することを期待したい。
- ・中期学校経営方針に示された計画を着実に実現する方向で取組が進められている。特に、学校の特色づくりのために重点取組項目としてあげられている「次代を担うグローバル人材の育成」「特色ある高校づくり」「生徒一人ひとりの能力を最大限に伸ばす教育の充実」については、十分な成果を挙げていると感じた。

- ・附属中学校での学習を6年間の継続した学びの基礎形成期と位置付け、読解力等の5つの力を身につけさせるための教育活動を展開している点は、中高一貫教育校での教育活動として評価できる。
- ・附属中学校において探究力を育てる授業の実施をしていて、討議・体験・実験実習・発表の場を多く設定していることから、中期学校経営方針に示された取組が行われている。また保護者アンケートより、88%以上の肯定的な評価を受けていることは、目標達成の成果であり、今後も期待できる。
- ・附属中学校において、中期学校経営方針に示された計画を着実に実現する方向で取組が進められている。特に、「DEEP 学習」、「サイエンススタディーズ」、「フロンティアタイム」などは、生徒の「読解力」、「情報活用力」、「課題設定力」、「課題解決力」等の育成に着実に繋がっており、十分な成果を挙げていると感じた。一方で、「高等学校進学後、中学校で育成した資質・能力を十分に発揮することができていない生徒も散見する」との課題も挙げられていることから、引き続き中高一貫教育校としての教育課程の工夫・改善に努めていく必要がある。

【進路指導】(高等学校)、【生徒指導・教育相談】(附属中学校)

- ・進路指導については、生徒アンケートについて全体的には肯定的な割合が一定数ある一方で、2年次は否定的な回答が高い。そのことに対して、コロナ禍で1年次からの丁寧な指導が受けられなかったことが影響していると考えられるという分析を行った上で、LHR などでの丁寧な情報提供や生徒理解に基づいた進路指導、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等と連携した活動などに取り組んでおり、今後の改善に期待したい。
- ・進路指導については、模擬試験会場の変更やガイダンスの中止など、コロナ禍の影響は否めないが、大学進学の高い意欲が高い生徒の要望に応えられるよう、教職員が丁寧に情報提供を行っている状況が伝わってきた。
- ・生徒の進学希望を優先した進路指導をしている点、「社会的能力」「気質」にも目を向け、生徒自ら探究し、自らの進路を実現する力の育成に取り組んでいる点は、当該校の教育理念からすると十分に評価できる。しかし、生徒一人ひとりに対しての指導について、新型コロナウイルス感染症拡大防止の対策の最中において難しかったと思うが、より一層の細かな指導が必要かと思われる。
- ・附属中学校における生徒指導については、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等と連携しながら、定期的な教育相談を展開している点は評価できる。
- ・自主性を大切にしながら、生徒一人ひとりを丁寧に見守っていることが伝わってきた。特に、日頃の職員の情報共有や、新型コロナウイルス感染症拡大を受けて、年間通して教育相談を行った点など、学校全体での取組が評価できる。



高等学校：SL(サイエンスレジャー)授業

(3) 学校経営の状況

観点	評価者 1	評価者 2	評価者 3	評価規準
《組織運営及び教職員研修》 (高等学校) 教職員が意欲的に業務に取り 組める組織であるか。また、 課題解決のための教職員研修 が行われているか	A	A	A	情報共有が徹底され、様々な問題に対して迅速に対処している 協力関係がある。また、学校は常に教職員の研鑽に努めている
	Ⓑ	Ⓑ	Ⓑ	一人ひとりの教職員は意欲的に業務に取り組んでいる。また、 様々な研修によって教職員の力量が向上している
	C	C	C	教職員組織の見直しが滞っている。また、教職員の力量向上の ための研修があまり行われていない
《学校に関する情報公開》 (高等学校) 学校便りや学校ホームページ 等を通じて適切に情報を公開 しているか	A	A	A	保護者・地域へ学校の情報を積極的に発信し、保護者及 び地域が必要な最新の情報を公開するよう組織的に努 めている
	Ⓑ	Ⓑ	Ⓑ	保護者・地域へ学校の情報を発信し、説明責任を果たし ている
	C	C	C	学校ホームページの更新が滞っているなど学校の情報 がうまく発信できておらず、保護者・地域に学校の教育 活動があまり理解されていない
《組織運営及び教職員研修》 (附属中学校) 教職員が意欲的に業務に取り 組める組織であるか。また、 課題解決のための教職員研修 が行われているか	A	A	A	情報共有が徹底され、様々な問題に対して迅速に対処している 協力関係がある。また、学校は常に教職員の研鑽に努めている
	Ⓑ	Ⓑ	Ⓑ	一人ひとりの教職員は意欲的に業務に取り組んでいる。また、 様々な研修によって教職員の力量が向上している
	C	C	C	教職員組織の見直しが滞っている。また、教職員の力量向上の ための研修があまり行われていない
《学校に関する情報公開》 (附属中学校) 学校便りや学校ホームページ 等を通じて適切に情報を公開 しているか	A	A	A	保護者・地域へ学校の情報を積極的に発信し、保護者及 び地域が必要な最新の情報を公開するよう組織的に努 めている
	Ⓑ	Ⓑ	Ⓑ	保護者・地域へ学校の情報を発信し、説明責任を果たし ている
	C	C	C	学校ホームページの更新が滞っているなど学校の情報 がうまく発信できておらず、保護者・地域に学校の教育 活動があまり理解されていない

【組織運営及び教職員研修】

- ・教職員アンケートにおいて「学校経営方針に基づき教職員が協力して円滑な学校経営がなされている」という項目が低いという課題に対しては、コロナ禍での業務負担等が要因であると分析し、土日の業務を平日に振り替えたり、フレックスタイムを導入したりするなどの活動に着手している点は評価できる。
- ・教職員アンケートにおいて「一人ひとりの教職員が意欲を持って業務に取り組む」という項目が低い事に対しては、中高の教員間の意識の違いがあると分析し、中高合同研修会の開催、中高一貫企画推進会議の設置など、中高の教員が共通理解の基で活動するための仕組みを整備し、中高一貫教育校としての教育活動の充実を図るように校長のリーダーシップの下で学校改善に取り組んでいることは評価できる。
- ・学習指導要領の改訂や附属中学校からの6年間を見据えた教育課程のスムーズな接続を意識し、中高一貫企画推進会議や研修会、分掌会、教科会などを通じて、中高教職員の協働を深める場を設定していることが、生徒の学びの継続性を高めていることと伺える。

- ・学習指導要領の改訂や附属中学校からの6年間を見据えた教育課程のスムーズな接続を意識し、中高一貫企画推進会議や研修会などを通じて、中高教職員の協働を深める場を設定していることが、生徒の学びの継続性を高めていることが伺える。引き続き、高校1年から入学してくる生徒との「融合」にも力を入れていってほしい。
- ・人が変わっても継承できるようにしていく工夫は必要かと思われる。
- ・課せられた使命やこれまで培ってきた学校としての質の維持・向上が継続できるよう管理職が努力している様子がうかがえる。教職員にもそれが伝わることを期待する。
- ・一般的な公立中高にあるような、生徒と地域の交流がもう少し必要かと思われる。災害時などにかあった際に、学校に対しての協力が得られることが期待できる。
- ・コロナ禍において、ICTの活用がよくされている。今後も積極的にICT活用を進めていくことで教職員の自己研鑽の時間を作るツールとなり得るので、今後の教育活動に良い方向で反映されることを期待したい。
- ・中高一貫企画推進会議の設置や中高合同研修会の開催などによる中高一貫教育を推進するための体制が、中学校での教育活動の参考になるなど、中学校での教育活動の充実にも繋がっていることは評価できる。
- ・附属中学校は教職員数が少なく、一人当たりの校務分掌数が多いというデメリットがある一方で、小規模であることで学校経営の意思決定や連絡調整等がしやすいというメリットもある。また、教室も同一施設内にあり、かつ職員室も中高合同であるなど、連携・協力しやすい環境にある。このようなメリットを生かしながら、高等学校との連携・協働をさらに促進させていくことを期待したい。

【学校に関する情報公開】

- ・情報公開については、ホームページ（HP）を頻繁に更新するなどして、外部への広報を積極的に展開している。またコロナ禍においては、情報機器を活用した配信の工夫をしている点は評価できる。
- ・メール配信システムや会員制ネットワークなどを活用して、保護者への情報提供をスムーズに行っている点が評価できる。HP上での情報発信も頻繁に行われており、説明責任をしっかりと果たしていると感じる。
- ・附属中学校では、生徒が考えた表紙やキャッチコピーを掲載した学校案内パンフレットを作成した他、HP、学校だより、学年だより等を活用して情報を迅速かつ効果的に発信できている。
- ・情報発信はWEBサイトを活用されていて、とても良いことだが、短所として発信側の一方通行になっていないか、時々確認しながらWEB活用することも必要である。
- ・情報発信については、HPのダイアリー機能を活用して、タイムリーに情報発信するなど積極的に取り組んでいることは評価できる。

（４）いじめに関する項目（いじめへの対応）

- ・いじめについては、いじめ防止対策委員会を定期的で開催し、年次会等で把握された情報を基に対策を検討すると共に、年次会→主任主幹会→管理職への情報が的確に伝達され、共有される仕組みを整備し、その共有された情報が職員会議等を通して全体で共有されることを重視した体制及び活動が行われている点は評価できる。
- ・校長が「いじめは必ず発生する」「いじめは絶対許さない」という姿勢で臨み、教職員に共通理解を図ることで意識を高めている。引き続き、日頃の観察、コミュニケーションとともに、アンケートやアセスメントを通じて生徒をしっかりと見守る体制を維持しながら、未然防止の取組や発生時の迅速かつ適切な対応に努めてもらいたい。
- ・教員、一人ひとりが生徒に寄り添っている姿が見受けられる。いじめゼロはなかなかの難題だが、ゼロになることに期待する。
- ・様々なデータに基づいて状況把握を的確に行いながら、指導していく取組を行っている点は評価できる。

- ・校長、校長代理が「いじめは必ず発生する」「いじめは絶対許さない」という姿勢で臨み、教職員に共通理解を図ることで意識を高めている。中学校段階では、幼さを残しつつ大人への発達途上にあるという特有の心身の状態を鑑み、引き続き日頃の観察、コミュニケーションとともに、アンケートやアセスメントを通じて生徒をしっかりと見守る体制を維持しながら、未然防止の取組や発生時の迅速かつ適切な対応に努めてもらいたい。
- ・生徒一人ひとりと寄り添った指導をしているので、重大ないじめ問題に発展しないことが今後も期待できる。

(5) 総合所見

- ・開校から13年目を迎え、開校時に掲げられた「世界をリードする科学技術関係人材の育成」を目的とした活動は、サイエンスリテラシーとして実践され、着実な成果を挙げている。また、中学校の開校から4年目を迎え、“融合”をキーワードに、校長のリーダーシップの下で、中期学校経営方針に基づいた教育活動が展開されている。附属中学校の1期生が高等学校を卒業する時が、中高一貫教育校としての真の成果が問われ始める時期であり、新しいフェーズを迎えようとしている同校のさらなる発展を期待したい。そこで、現在の取組をさらに進化させていくための検討の視点として次の点を指摘したい。
 - 1 中高一貫教育校として、6年間というスパンでの教育活動や、中高の教職員の共通理解に基づく教育活動を展開するために、中高合同研修会の開催や中高一貫企画推進会議の設置をするなどの取組は始まっている。このことにより、組織的な側面や活動のための仕組み的なところは整いつつあると言える。今後は、教育課程を中心に、その仕組みの中で何をどのように取り組むのかという質的な側面の充実を期待したい。特に、サイエンスリテラシーとサイエンススタディーズという課題探究型授業の6年間の一貫した教育活動の充実に加えて、教育課程全体での一貫性をどう持たせるのかということを検討し、真の中高一貫教育校として教育課程の充実を期待したい。
 - 2 中学校の訪問調査資料において指摘されている課題「令和2年度附属中学校より本校高等学校へ進学した生徒が、附属中学校で育成した資質・能力を高等学校で十分に発揮することができていない生徒が散見されること」からも、中学校から高等学校での円滑な進学を実現するための教育活動の改善が必要であることが伺える。また一方で、高等学校から入学する生徒と附属中学校から入学する生徒という異質な集団が在籍することから、これら2つの集団が共存する学校における教育課程や教育活動の充実に向けたカリキュラムマネジメントが重要である。
 - 3 教員が意欲をもって教育活動に従事するためにも、教員の働き方改革は重要である。特に同校は、特色ある教育活動を展開するために、放課後や土日、長期休業期間などにも様々な活動が提供されている。フレックスタイムの導入など、教員が選択的に働ける環境を整備していくことは重要な視点である。今後は、教育活動のさらなる充実を図っていくためにも、教育委員会との綿密な連携及び教育委員会の支援に加えて、学校外の教育力の積極的な活用や連携協働という視点をさらに促進させていくことが重要である。“学校が行う”ということではなく、“教員が行う”と理解するのではなく、“学校という場”で行うという言葉として理解して、教員の役割の明確化と、権限と責任の明確化をした上で、外部機関との多様な連携・協働活動のさらなる充実を期待したい。
 - 4 進学指導重点校として、国公立大学の現役合格率を目標に掲げて取り組み、成果を上げていることは評価できるが、現在の進学状況や同校の特色を生かすという点で見ると、もっと多様な目標設定でもよいのではないかと考える。例えば、海外の大学への進学実績という視点を取り入れてみてもよいのではないかと。

- ・学校側の説明と共に、授業中の生徒の様子を参観したが、落ち着いた雰囲気と恵まれた環境の中で、一人ひとりが目標や課題意識をはっきりと持ち、主体的に学習に取り組んでいるのを感じた。特に、開校以来の目的である「世界をリードする科学技術人材の育成」については、着実に成果を積み上げている印象である。中高一貫教育校として6年間のカリキュラムを経た生徒が、自信をもって次のステップに進める力を身に付けることができている。
- ・高校から入学して来る生徒については「融合」を謳い、中学校段階で入学した生徒が引っ張る形での相乗効果をねらっているとのことだが、中高を通じて課題研究を進めるための教育課程を経験する生徒と、高校3年間で同様の成果を目指す生徒との差をどう埋めていくのかについては、引き続き工夫・改善していくことが期待される。
- ・コロナ禍の影響で、至る所で学校としての創意工夫がされているものの、本来生徒が受けられるはずであった様々な特徴的体験活動が制限される形になっており、そのことが今後どのように生徒の学びに影響していくのかを検証していく必要があると感じた。
- ・教職員の異動にともない、開校の理念、教育目標を継承することに苦労されているが、そのことに問題意識を持ち、中高合同の職員研修会を開催するなど、様々な研修をおこなっている姿勢に今後の質の向上に期待ができる。
- ・進路について、学校名だけにとらわれず、生徒の将来目標の実現にむけた学校学部選択を今後も続けてほしい。
- ・学校見学をした際に出会う生徒すべてが、突発性のプレゼンにも対応できるということが素晴らしい。グローバル人材の育成という目標の成果のあらわれであり、今後も期待したい。
- ・教員一人ひとりが当該校の特色を更に理解をし、指導に取り組んでいけるように研修等の充実・確保をし、続けていく必要がある。

【附属中学校について】

- ・第1期生も高等学校に進学し、これからが同校の本当の真価が問われてくると言える。その意味でも、中高合同研修会の開催や中高一貫企画推進会議の設置という中高一貫教育を推進していく体制を活用した中学校の教育活動の充実が重要である。今後もより一層、高等学校との連携協働を密にした教育活動の充実に期待したい。同一敷地内及び同一校舎内で、高等学校3年生から中学校1年生が在籍し、様々な活動の中で異年齢の交流も行われているという点は、身近にロールモデルを見つけることができ、早期から様々な刺激を受けて、サイエンスリテラシーに取り組むための力を培う上で意義あることと思う。その一方で、発達段階の異なる子どもたちが1つの集団で学ぶということの負の側面もあるので、教育相談やデータによる生徒理解という同校がこれまでも重視してきた取組をさらに充実させ、学習の側面だけでなく、精神面でも個に応じた支援や指導が展開され、中学から高等学校への円滑な移行が図られることを期待したい。
- ・学校側の説明と共に、授業中の生徒の様子を参観したが、落ち着いた雰囲気と恵まれた環境の中で、一人ひとりが目標や課題意識をはっきりと持ち、主体的に学習に取り組んでいるのを感じた。中でも、グループでの話し合いの場面で、多くの生徒が論理的思考に基づいて自分の意見をしっかりと述べ、他の意見にも共感的に耳を傾けている姿が印象的だった。一方、コロナ禍の影響で、至る所で学校としての創意工夫がされているものの、本来生徒が受けられるはずであった様々な特徴的行事や体験活動が制限される形になっており、そのことが今後どのように生徒の学びに影響していくのかを検証していく必要があると感じた。
- ・中高一貫教育校の特性を生かし「グローバル人材の育成」の基盤形成期を工夫し高校へつながるようなカリキュラムがよく編成されている。今後はそのカリキュラムに、生徒・教職員(アンケート結果より、特に教職員)とも人がついてくるよう、更なる努力を期待する。



令和4年2月発行 横浜市教育委員会事務局学校教育企画部高校教育課
〒231-0005 横浜市中区本町6-50-10
電話 045-671-3272 FAX 045-640-1866